

Vol.8 IN インドネシア ジャカルタ



渡部 雅靖

Masayasu Watanabe profile

- 1952年 秋田県出身
- 1971年 秋田県立秋田高等学校卒業
- 1975年 明治大学商学部産業経営学科卒業  
日商岩井株式会社入社
- 1985年 日商岩井鉄鋼製品販売株式会社 出向
- 1988年 日商岩井株式会社帰任
- 1998年 日商岩井金属販売株式会社 出向
- 2000年 日商岩井株式会社 退職  
株式会社サンロックオーヨド転籍取締役就任  
三重事業部・秋田キサカタ事業部・  
本社営業部に所属
- 2007年 株式会社メタルワン 入社  
インドネシア国 PT. IWWI 社出向

現職：  
PT.Iron Wire Works Indonesia President Director

Jl Daan mogot KM.18 Batu Ceper Tangerang 15122  
Banten-Indonesia  
Phone: +62-21 6196247  
Fax : +62-21 6190096  
HP : +62-815 1059 0846  
E-mail: watanabe@iwwi.co.id  
Website: www.ptiwwi.com

学生時代

秋田県の寒村に生まれました田舎者が上京しましたのは、1971年、今から40年以上も前の事になります。強い都会への『憧れ』の気持ちで上京しました。明治大学に入学したのは、商科の分野で有名で、出身高校と同じく歴史のある硬派な学風だったからです。

上京後、一番初めに新宿のメンズショップ「三峰」に行き、ドレスアップしました。今思えば、姿かたちだけでも、都会の人達に負けたくないとの気持ちでした。また、西日本の方から来られた皆さんは

普段の言葉で話しておられたのですが、東北の言葉は通じず、変な

東京弁の真似をしたものです。そんな、学生生活のスタートでした。我々は、団塊の世代の少し後、比較的安定した時期であったかと思えます。入学後の5月連休明けに、商業通信と貿易実務の文化サークルの門をたたきました。講義・サークルでの勉強もさることながら、友人達と昼夜にわたって議論という名を借りた『自由な時間』を持たせて頂きました。管轄は商学部の石田先生、ゼミは管理会計学の松尾先生で、いずれも名物授業でした。やはり最も自分自身が啓蒙・

触発された経験といえ、3年次に、サークル活動の中で、関東の

大学10校の理事長を務めさせて頂いた事です。組織をまとめる大変さを感じつつ、少しずつ自信もついていきました。そして、3年次の終わりから、海外取引、開発輸入などを行う総合会社への就職希望を鮮明にし、就職先は日商岩井株式会社に決めました。卒業まで自由奔放に過ごさせて頂いた、明治大学での学生生活は恵まれたもので、本当に感謝しております。

世の中に出てから

勇んで就職してはみたものの、商社冬の時代に突入。日本は安定成長に舵取りを変えていきましたので、商売のネタが減少し、配属は、大阪の管理部門となりました。最初の3年は金融関係の分野で、今思えば、現在の基礎を築かせて頂いたと思いますが、4年目から、鉄鋼製品販売の営業部に出て、線材という比較的少数派の業界で活動させて頂きました。その後の会社形態は多様に変化しましたが、線材は小生のライフワークとなりました。

華やかな貿易取引を担当させて頂けるとイメージしていましたが、国内での鉄鋼製品の仲介取引が主で、当然ですが、若手には手柄は回ってきません。関係会社への出向を経験し、より良い会社を立ち上げる事を使命とされた私は、海外勤務のチャンスを他人に譲りながら、管理職に昇進します。1990年を過ぎ、世界の流れは、中国・アジアに本流が変化し始め、国内・海外の取引融合が進んでいきましたので、私にもチャンスが回ってきました。主に新興国に、

工場の立上げなどの仕事にまいりました。人・物・金という重要な経営資源活用に対して、それまでの国内経験が大きく役に立ったのは言うまでもありません。

また、学生時代に、少しかじりました貿易実務の知識も役立ちました。但し、私が48歳の時、事業再編成の波にのみ込まれ、2000年に、25年間お世話になりました会社を退職し、関係会社の役員となりました。その後6年間で、低成長になった事業分野の切り離しや、事業再構築の仕事を担当しました。業務内容は本当に厳しく、試練の時代でした。

#### インドネシアにて、今

2007年9月に、突然、会社に復職してインドネシアの事業投資先に責任者として赴任してほしいとの依頼を受けました。今頃、なんて勝手な事をいうものだと思いますが、気持ちの整理と家内との相談に、少し時間をもらいました。55歳の時です。従来の生活スタイルを大きく変化させる事が必要なことにて、非常に勇気が必要なことでした。が、家族が後押ししてくれたことを背景に、将来更に、新興国での事業が開花すると信じて、アウエーに出ようと決意しました。



酸洗設備

インドネシアは、1990年代の雰囲気とは全く違い、非常に活気に溢れ、新たなオーストラリア王国に成長していました。2億4千万人の素晴らしい人口ピラミッドの形を持ち、豊富な労働力の中で、内需主導の経済が形成され、東南アジアの経済成長を支える大国となるでしょう。国民性としては勤勉なのですが、積極性や責任感に欠ける部分があります。この様な環境の中で、約320名の従業員を抱えて、自動車・オートバイ用の部品になる鉄鋼製品の材料の二次加工分野を担当しています。グローバル化が進む中で、日本の

鉄鋼業の技術移転を促進させながら、両国の経済発展に貢献していくことを喜びとして感じている次第です。

一方、2010年の秋に、明治大学の純粋な同窓会であります、『紫紺の集い・ジャカルタ』が立ち上がりました。小生が同窓会長をさせて頂いております。現在の登録会員は34名程度ですが、幅広い年代が隔月に集合し、タイムマシンに乗っては、懇親会を通じて青年の如く語り合っています。明治の団結は、このインドネシアでも隆々としております。

今年還暦を迎えましたが、インドネシアという、国・人に丁寧な接しながら、自分自身の会社人生の仕上げとしたいと思っております。若手時代に描いていた「格好のよい」駐在員生活ではありませんが、まさしく手ごたえのある、実に充実した仕事をさせて頂いていることを記しまして、終章としたいと思います。会社の形態は変われど、38年間一貫して、線材・特殊鋼業界に身をおかせて頂きましたことに感謝しながら。

インドネシアの仲間達